HCニューズレター

No.20

Human Care News Letter

2019年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

こころとからだの健康とケア

日本ヒューマン・ケア心理学会第二十回大会を開催して

日本ヒューマン・ケア心理学会第二十回大会 大会委員長　京都橋大学健康科学部心理学科　菅　佐和子

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十回大会は、日本健康心理学会第三十一回大会との合同開催として、平成三十年六月二十三・二十四日に、京都市山科区の京都橋大学において行われました。

●合同開催の当番校として

本会と健康心理学会は、両方に所属している会員も多く、関連性の高い学会です。しかし学会の規模としては相当の開きがあり、合同開催にはそれなりのむずかしさが伴うことも危惧されました。この合同開催を、あくまでも対等な立場で、発展的な視野を備えたものにするために、当番校としての京都橋大学健康科学部心理学科では、両学会本部との連絡を密に、日比野英子合同大会長（兼・健康心理学会大会長）、濱田智崇ヒューマン・ケア心理学会大会事務局長、田中芳幸健康心理学会大会事務局長、そして菅 佐和子ヒューマン・ケア心理学会大会長の四名を中心に二十名余りの全教員が一丸となって準備に取り組みました。

ところが、大会直前の六月十八日に、大阪府北部地震が発生、多大の被害を出した上に余震の恐れもあり、学会大会の開催自体が危ぶまれるという緊急事態が生じたのです。幸い、学会大会は開催出来ましたが、終了直後の台風以降、西日本を未曾有の豪雨が襲い、さらなる被害が発生しました。大型台風、北海道大地震など、大規模な自然災害はその後も続いています。私どもは、大自然の破壊力に呆然と立ち尽くす思いのなかで、亡くなられた方々のご冥福を祈り、被災された方々にお見舞いを申し上げ、被災地の復興を心より祈らずにはおられません。



大会委員長　菅佐和子先生（写真右）
合同大会長　日比野英子先生（写真左）

●大会テーマとプログラム

本合同大会のテーマは、「こころとからだの健康とケア」と致しました。特別講演には、村井俊哉先生（京都大学大学院医学研究科・精神医学）をお招きし、「『社会性』という視点から見た心の健康」というテーマでご講演をいただきました。村井先生は、「社会性」とそれを支える「脳」という観点から、「社会性」という多様な心の動きの中には、「価値観」が含まれており、「価値観」には大きな個人差があり、それが人間のダイバーシティ（多様性）の源となっている故に、対人援助職の立場にある者は、このようなダイバーシティに対して寛容であることが必要であろうという、貴重な提言をしてくださいました。

準備委員会企画シンポジュウムは、「心と脳ー脳科学、運動、イメージ、発達の研究から」というテーマで、月本洋先生（東京電機大学工学部）、森口佑介先生（京都大学大学院教育学研究科）、児玉隆之先生（京都橋大学健康科学部）をシンポジストに、脳と心に関する各分野の最先端の知見について縦横に語っていただき、大変刺激的なシンポジュウムとなりました。

教育講演は、長年にわたり助産学・看護学の分野でご活躍されてきた遠藤俊子先生（京都橋大学副学長・看護研究科長）に「家族のきずなー夫立ち合い出産」について御講演をいただきました。出産が女性、パートナー、子ども、家族にどのような意味を持つか、どのような支援が望まれるかについてのお話は、会場に温かな余韻を残すものとなりました。

研修会は、「『児童虐待』の対応に役立つ解決志向・入門編」と題して、宮井研治先生（京都橋大学健康科学部）に虐待対応に有効な「解決志向」という技法について、ライブ感覚にあふれる研修を行っていただきました。

今回の大会は、おかげさまで、非会員も加えると四百人を超える参加者にお集まりいただき、大変充実した大会となりましたことを、こころより感謝いたします。

シンポジウム

「トランス・カルチュラル・ヒューマンケア ～ケアは国境を越えて～」

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十回大会では、国際社会におけるヒューマンケアに着目したシンポジウム「トランス・カルチュラル・ヒューマンケア～ケアは国境を越えて～」が開催されました。シンポジウムでは国際支援／国際協力に携わる研究者や専門家の四名の先生方から講演を伺いました。

関谷大輝先生（東京成徳大学応用心理学部／准教授）からは、日本人とミャンマー人のストレスケアに関する研究成果を報告いただきました。被嫌悪回避（他者から嫌われることを避ける傾向）と仲間集団の特徴、仲間集団との関わりが、心理的ストレス反応にどのような影響を及ぼすかについて調査され、日本人とミャンマー人とのストレス反応の要因に相違がみられた結果から、文化横断的な支援を行う際の留意点についてご示唆いただきました。

依田健志先生（川崎医療福祉大学医療技術学部／准教授）からは、インドネシアとマリ共和国における支援活動についてご紹介いただきました。インドネシアでの総合マラリア対策プロジェクトでは、媒介蚊の同定と感染者の診断治療、住民への健康教育と蚊帳の配布を実施した結果、マラリア罹患数と乳幼児死亡率が減少したこと、さらに、現地に適した方法で住民に向けた健康教育を取り入れたことが効果的であったという報告がありました。マリ共和国での村落給水プロジェクトでは、ハンドポンプ式深井戸の掘削・設置支援を行い、住民主体で井戸管理組合を形成し、自主的に水管理ができるような支援を行ったことにより、支援後も継続的かつ効率性をもって住民生活に根付いていたという報告がありました。



シンポジウムの様子

清水裕子先生（香川大学医学部慢性期成人看護学／教授）からは、カンボジアにおける学校保健体制の構築を目的に、現地の小学校教員に対する衛生教育と技術支援の実際についてご報告いただきました。現地での支援だけでなく、現地の行政や学校管理者、教員を日本に招いた研修プログラムの取り組みは、学校衛生環境の改善に寄与したという事業内容の紹介がありました。最後に、熊谷信広先生（JICA：国際協力機構国際協力人材部健康管理課専任参事）からは、JICAにおける人材育成の取り組みについてご紹介いただきました。

先生方のご報告を伺い、改めて、「国境を超えるヒューマンケア」は、その国や地域の特徴（伝統や文化、価値観、宗教、生き方、生活スタイルなど）を知り、異文化を理解したうえで、その国や地域に根づくような支援を考慮することが大事であると感じました。本シンポジウムに参加して、グローバルな視点でヒューマンケアのあり方を再考することができ、学び多い時間となりました。

（埼玉県立大学　大場良子）

合同企画一般公開シンポジウム

「認知症の理解と支援」

人類百年時代と言われる昨今、高齢になっても健康を保ちながら活き活きと生活していくことが、人類の大きな目標の一つとなってきています。老化は誰にでも訪れる現象であり、これに伴って、認知機能の低下は直面せざるを得ない問題です。

本シンポジウムでは、認知症ケアに関する最新の研究に触れさせて頂きました。私が大変興味深く感じたものが二つあります。一つは、「CANDY」という認知症のスクリーニングテストです。これは、従来のテストのように知能面から認知症を把握するものではなく、決められた項目を用い、自然な会話の中に認知症の状態を同定しようとするものです。受検者が「知能をテストされている」という否定的な感覚に対して配慮ができ、なおかつスクリーニングとして代表的なMMSEと同等の感度を有しているということで、これは画期的だと思いました。

二つ目は、「テレノイド」という認知症ケアに用いられるロボットです。テレノイドは、顔の要素の多くがそぎ落とされており、私などが見ると不気味な顔をしているのです。しかし、認知症を呈している方にとってはなぜか愛着がわく。この点について、他の参加者から「自分の居心地の良い人や、その人が思う人物を投映できるから、テレノイドのように省略された人間が良いのではないか」という意見があり、腑に落ちた思いでした。よく認知症の方が、お見舞いに来た人を別人と間違える、という場面を目にした方も多いでしょう。もしそれが、見たい人を投映しているからだとすれば、テレノイドはこうした認知症の特性に配慮出来ているのではないかと、活用の可能性を感じました。

また、テレノイドの特徴として重要なのは、それを操作するのが人間だということです。介護者が、テレノイドのカメラとマイクを通して語り掛けるのです。介護者の感想では、直接だと出来ないようなコミュニケーションが、テレノイドを介すことで自然にできるということでした。直接介護をしていると、どうしても素直に語りかけてあげられないこともあるでしょう。同シンポジウムにおいても取り上げられていましたが、介護者のバーンアウトが以前から問題になっています。ケアに伴う当事者や介護者の心身の健康を考えるならば、テレノイドのように、上手にケアを間接化していくことが、今後の人類百年時代には必要なことなのかもしれません。

（オアシスクリニック　飯島　誠）

「第二十回日本ヒューマン・ケア心理学会、第三十一回日本健康心理学会合同大会に参加して」

京都大学大学院　人間・環境学研究科　佐藤　泰子

その日は、前日までの都の汗を洗い流すような心地よい雨。会場は都の喧騒から我々を解放する山科の山懐に抱かれた場所にありました。一日目のシンポジウムでは時間がオーバーするほど登壇者の話は白熱するものでした。フロアーから質問したかったのですが時間切れで断念。口述発表の場では、質問が飛び交い活発な議論が繰り広げられていました。発表者もみな流暢な話ぶり。「この学会は一味ちがう！」と感じました。また、陳腐な「現象学」を本学会に持ち込んだ筆者にも各先生からご質問いただき感謝いたします。一日目のお昼は学食で「胡麻チゲ冷麺」。「この学食は一味ちがう！」激ウマなのであります。

二日目は晴天。京都大学村井俊哉先生の特別講演も圧巻でした。ハイテク社会主義でよしとされる「スピード、柔軟性、エネルギー、社交性」と対照的な「締切を過ぎても納得がいくまで考え、どうしようもなく頑固で、いつもどことなく疲れていて、無愛想で乾杯の挨拶もできない」はいけないのですか？という村井先生の問いかけに瞠目。価値は時代的で相対的という村井先生のことばは、精神障害者への偏見や差別を助長させていった明治政府の精神衛生行政と、その残渣に絡めとられたままの現代社会への問いかけだと感じます。精神障害者への偏見という壁の漆喰の調達者は当時の法律のみならず実は当事者の周囲の人々であるのかもしれないのです。高度経済成長を支えてきた社会の構成員が能率主義を盾にして看過してきた精神障害者への不当な処遇とスティグマの問題に再度、目を向けたいと思う契機を与えていただきました。

学会論文賞

「優秀発表賞を受賞して」

東北大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻
臨床心理研究コース　博士課程前期2年　富田　悠斗

この度は大会優秀発表賞にて表彰して頂き誠にありがとうございます。一年間私の研究指導をしていただいた安保英勇先生、卒業論文で研究の基礎を作って頂いた岩手大学の山口浩先生を始め、研究に携わって頂いたすべての皆さんにこの場を借りて感謝申し上げたいと思います。この度は私の研究に協力して頂きありがとうございました。皆さんのおかげでこのような素晴らしい賞を受賞することが出来ました。

私は現在、私たちが日常的に行っている感謝という行為・感情の適応性に着目し、この感謝という行為、感情を用いた心理療法的介入(以下感謝介入とする)の開発を目的とした実験的研究を行っております。学会では感謝介入技法の簡便化を目的とし、一回の感謝に関する出来事想起が個人に与える影響について検討した研究を発表いたしました。結果としては本研究においても感謝介入特有の効果は実証することが出来ませんでしたが、何か出来事を想起するということの効果を実証することができました。つまり感謝に関する出来事ではなく何か出来事を想起するだけでも否定的感情の低下に影響を及ぼすことが明らかとなりました。今回の結果を受け、現在では再度感謝介入研究の問題点を整理し、感謝介入の操作の妥当性の検討を行っています。具体的には従来の感謝介入は感謝したことの記述を求めていますが、この感謝したことの記述では介入操作として影響力が弱いことが先行研究より予想されます。そのため、現在は感謝したことではなく、〝出来事に対して感謝の認知でとらえる〟という認知的リフレーミング機能を持った感謝介入操作の効果の検討を行っています。

今後はさらに自分の研究に研鑽を重ね、より日本人にとって効果のある感謝介入技法の開発に邁進していこうと思います。この度はこのような光栄な賞を頂きまして、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

学会論文賞

「優秀発表賞を受賞して」

東京成徳大学大学院心理学研究科　阪無　勇士

この度は優秀発表賞を授与して頂き、大変光栄に感じております。審査の先生方、ならびに平素より厚くご指導頂いている石村郁夫先生、そして、お世話になっている先生方や研究室の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回は「一時保護所職員の受容的な関わりを促進するプロセスの検証～施設内体験や保護所への愛着がバーンアウトを介して及ぼす影響～」を研究テーマにして発表をさせて頂きました。タイトルの通り、虐待を受けた子どもたちの傷つきをどのように受け止め、どのように成長へと繋げていくのかについて、私は生活場面における職員の支援のあり方に関する研究を続けております。今回、優秀発表賞を授与して頂く過程で特に強く感じられた二つのことを書き留めたく思います。

一つめは一時保護所の実情を温かく受け入れて頂けたことです。近年の一時保護所は虐待を受けた子どもたちで溢れており、施設側が十分に支援できるだけの許容範囲を超えています。このような施設では、子どもたちは職員に受け止めてもらえない傷ついた心を問題行動として再現し、問題の対応に疲弊する職員はますます児童の気持ちを受容できなくなるといった支援の悪循環が起きています。「児童福祉の専門機関」であることから批判的な評価がなされやすい現状にも関わらず、皆様に最後まで温かい眼差しで話を聴き入れて下さったこと、大変うれしく思いました。

二つめは研究方法を評価して頂けたことです。一時保護所における児童支援に関する研究は、秘匿性の観点から研究そのものが非常に少ない状況にあります。このため、私は現場の実情を明らかにすることから調査を進め、支援のプロセスを提唱し、今回の研究によりプロセスの一部を実証できました。懇親会の場においても、多くの先生方から快くコメントを頂きました。一連の研究成果を現場に還していくにあたり、受賞というさらなる励みを頂けたこと、大変心強よく、厚く感謝申し上げます。



優秀発表賞受賞の様子

研修会報告

「『児童虐待』の対応に役立つ解決志向・入門編」

講師　京都橘大学健康科学部　宮井研治先生

二〇一八年六月二十四日、京都橘大学にて宮井研治先生の「『児童虐待』の対応に役立つ解決志向・入門編」に参加した。感想の結論から記すと、とても有意義で、なおかつ臨床実践に向かっていくエネルギーをいただける研修会であった。

研修は、大きく分けて二つのパートから構成されていた。前半は児童虐待対応に関わる面接の難しさの背景に関する講義、後半は研修タイトルにもなっている解決志向の発想の紹介とそれに基づく演習であった。前半の講義のパートも整理されていて理解しやすかったのだが、参加者の心に特に強く残ったのはおそらく、後半の演習のパートだったのではないだろうか。



研修会の様子

「この日の朝の、少しだけマシだったなと思えることを話してみましょう」という教示のもとに行われた導入のペアワークでは、ペアとなった参加者同士が相手の人となりに自ずと関心を注ぐこととなったためか、会場の雰囲気が一挙にうちとけたものになっていった。

また、コンプリメント(ほめる)とスケーリングのエクササイズでは、それに先駆けたデモンストレーションを通じて、宮井先生のやりとりの妙味を拝見する機会を得た。臨場した参加者だけにしかわからないような、まさに「ライブ感」に溢れたやりとりだったといえよう。私としては、宮井先生の巧みな言い回しにも感銘を受けつつ、それ以上に、デモンストレーションの相手役となった参加者に宮井先生が注がれていたあたたかな関心こそが先生の臨床のエッセンスだったのではないかと感じている。

この研修で語られた事柄は、福祉領域のみに留まる事柄ではなかろう。私は教育領域での臨床実践の機会が多いのだが、今回の研修で学んだ事柄は、教育領域においても不適応状態にある児童生徒への面接のみならず、教員へのコンサルテーションや、健康な子どもらとの面接や日常の関わりにも大いに活かせるものだと考える。また、対象者にどう対応するかという話だけではなく、その人が何に悲しみや不安を抱き、何に喜びや希望を見いだすのかを一緒に確認していく、丁寧な対象者理解のプロセスを学んだと考えている。このようなやりとりを重ねる中で、対象者との信頼関係の醸成が促進されていくのであろう。

研修後の参加者の表情を見るに、参加者の多くは、心に希望が膨らむような思いを抱きながら会場を後にしたのではないだろうか。私自身も、とても充実した研修に参加することができたという満足感を抱いている。企画・運営に当たられた先生方と講師の宮井先生に、この場をお借りして感謝申し上げます。

（島根大学教育学部附属教師教育研究センター　西島雅樹）

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第21回大会のお知らせ

〈痛みとヒューマン・ケア〉

開催日程：研修会2019年6月15日(土)・学術集会2019年6月16日(日)
開催会場：桜美林大学四谷キャンパス(東京都渋谷区千駄ヶ谷1-1-12)

大会テーマ：「痛みとヒューマン・ケア」

・大会企画シンポジウム 「痛みに対するヒューマン・ケア・アプローチ」
　座　　長：長田久雄　(桜美林大学大学院老年学研究科 教授)
　話題提供者：井関雅子先生　(順天堂大学医学部麻酔科学ペインクリニック講座 教授)
　　村上安壽子先生(順天堂大学医学部附属順天堂医院麻酔科・ペインクリニック 臨床心理士)
　　杉山尚子先生　(星槎大学 教授)
　指定討論者：土居真太郎先生(松弘会三愛病院ペインクリニック科医師)
・研修会 「解決志向のディスカッション手法を学ぶ」
　講　　師：鹿嶋真弓先生　(高知大学大学院総合人間自然科学研究科 教授)
　※定員50名(要事前申込。席に余裕がある場合のみ、当日参加可)。
　※会員には修了証を発行。

今後のスケジュール
1 発表申込　2019年2月1日(金)～3月29日(金)
2 大会プログラム・抄録集原稿提出締切　2019年4月19日(金)
3 大会・研修会参加申込　2019年2月1日(金)～5月15日(水)

■大会プログラム・抄録集は大会当日(研修会参加の場合は研修会当日)に総合受付にてお渡します。

■参加申込
・研修会及び学術集会の参加申込
　https://form.os7.biz/f/b5713c85/
・一般演題(口頭・ポスター)及び自主企画シンポジウム・ワークショップの発表申込
　https://form.os7.biz/f/25c4823a/

■お問い合わせ
・大会に関するお問い合わせ
日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第21回大会大会事務局
O-Lab ／長田心理行動科学研究所　担当：関野
E-mail：2019humancare@gmail.com
・研修会に関するお問い合わせ
日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第21回大会・研修会　担当：大場
E-mail：2019HC.kenshu@gmail.com

第21回大会準備委員会委員長：長田久雄(桜美林大学)

編集委員会より

学会誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。学会ホームページからも投稿できるようになっております。ご不明な点などは左記機関誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文のPDFが学会Webサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ID:HC2019　パスワード:Q2F5t7b

(Web担当　羽鳥健司)

編集後記

当学会に限らず今やwebでの広報活動はあらゆる団体にとって必須であると思います。広報担当の私としては、最低限のhtmlやタグの仕組みくらいは理解して実践できるようにならないといけないと思い、入門書を購入して勉強したはずなのですが、苦戦続きで心がめげそうです。頼りにしていた詳しい大学院生も修了してしまうし、来年度に行われる役員選挙で私が広報担当として再選する可能性は限りなく低くなっています。次回の第二十一回学術集会のスタッフの皆様は、萩原様を筆頭にwebに精通していらっしゃるので安心してお任せできます。作るのは大変ですが、このニューズレターのような紙媒体の方が私は安心します。

(広報担当　羽鳥健司)

学会事務局および機関誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学　遠藤公久研究室気付
Tel & Fax: 03-3409-0914
E-mail: humancarepsy@redcross.ac.jp

●機関誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科　安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax:　022-795-6149
E-mail: jhcs@m.tohoku.ac.jp